

さんけん新聞

発行
NPO法人
三段峡-太田川
流域研究会
(代表・本宮炎)

〒731-3813
広島県山県郡
安芸太田町
柴木1734
090-34213046

一口メモ

▼人も花も準備急ぐ
広島市内の桜が満開になる頃、三段峡はまだ早春の趣だ。探勝路では人力で残雪や倒木、落石が取り除かれる。四月中旬以降には、黒淵荘や渡船の整備が進む。探勝路脇の花

たちは四月から毎週のように入れ替わって咲く。人も植物も入峡者を迎える準備を整える。

マツダ財団・市民活動支援事業 さんけんの企画を選定

自然の感動伝える人材育成

マツダ財団が実施する第34回市民活動支援事業の助成金交付団体に、さんけんが選ばれた。対象になった事業は、青少年へ多様な生態系や自然への感動を伝える人材を育成する、インタープリター養成講座の実施。助成金は40万円。

インタープリター養成講座を実施

同財団の市民活動支援事業は「青少年が興味を持ち、多くの感動を得る生活体験の機会の提供、地域社会づくりの諸活動」の中から選考される。今年度は広島、山口両県から九十九件の応募があり、三十件が選ばれた。さんけんが応募した養成講座の企画案は、自然教育に詳しい専門家を招いて講習会を開き、実際に青少年が参加して、学びの多い自然体験をする。受講者が実践的なインタープリテーション技術を習得し、次世代のリーダーを目指す内容になっている。講習会は五回程度を予定し、自然体験教室も組み込んだ。

次世代のリーダー育成は、自然から継続的に得られる感動を青少年へ提供できると同時に、過疎が進む安芸太田町内でインタープリテーションを学ぶのは、地域存続のカギとも位置付けた。今後、講師と協議し、講習日程や具体的なカリキュラムを組み立て、参加者を募集する。

三段峡ゲートウェイ中期計画を策定

三段峡リポーンプロジェクト委員会は三月二十八日、二〇二〇年までの三段峡ゲートウェイ中期計画を策定した。さんけんが同計画ワーキンググループの事務局を担当した。計画は観光庁の「地域資源を活用した観光地魅力創造事業」の対象になって策定される「安芸太田町観光振興基本計画」のリーディングプラン。同委員会から町へ提出される。

交流館にビジターセンター開設



ビジターセンターが開設される三段峡交流館

さんけんの二〇一八年度事業として三段峡正面口の三段峡交流館を活用した、小規模なビジターセンターの開設が決まった。今年度は本格的なセンター設置の準備期間と位置づけ、ステージの壁面などに、峡内の自然や歴史を紹介する手づくりの展示を計画している。週三日程程度の不定期オープンを目指す。

インフォメーション機能に加え、来訪者情報やニーズなどの基礎データを収集する予定。来以降の本格運用の足がかりにする。情報提供や学びと体験の場、サービス向上の拠点となるビジターセンターの設置は、さんけん設立当初から大きな目標だった。

自然体験学習 リーダー研修 受講

太田川流域振興交流会議主催の「太田川子ども交流事業 自然体験学習リーダー研修」が広島市中区で開かれた。本宮宏美事務局長と小林久哉理事が受講した。

研修では、人間科学研究所の志賀誠司所長が、環境学習を進める上での基本事項、体験学習の理論、リスクマネジメントの基礎、知って得する指導技術について講義した。

ボランティア活動 参加者募集

三段峡を清掃しながら歩こう会

4月15日(日)10:00 三段峡正面口集合(14:30 解散)
参加費 1,000円(会員、賛助会員は無料)
準備物 長靴、軍手、タオル、飲料 ※終了後懇親会
参加・弁当の申し込み 12日までに事務局へ
申し込み・問い合わせ=事務局・本宮宏美 ☎090-6078-0835

南峰と歩く

⑧ 立石(たていし)

餅ノ木から右岸に沿って八幡川を遡り、「霧ヶ瀬」の橋を渡って進むと、縦長の大きな岩が川中に聳える。ここが立石である。一般的には「岩」と呼ぶような大きなものでも三段峡では「石」とする。岩は岩盤を指し、川中に転がっているものは大

きくても石である。行政の連携を重視 「立石は戸河内村と八幡村との境界に位置し、大石累々たる中に碑の如き一大石直立して緑樹を負い、その一側に奔流を抱きて雅趣を有す」と、南峰は描く。

この辺りから上流は当時の八幡村、現在の北広島町である。一九二三年、正式な峯谷名が必要になったとき南峰は、「戸河内峡」としなかつた。行政の枠を越えた連携を重視したからである。江戸期の文献に登場する「二帯が中国の三峽・三峽に

似る」という記述と、滝によって全体が「三段」をなす地形から「三段峡」とした。西村民保勝会作

川法上では柴木川になっていくが、葎ヶ原上流は八幡川と呼ぶべきだ。同年八月、名勝指定と探勝路の整備を目的に発足した三段峡保勝会の設立総会には、戸河内と八幡の両村民が出席した記録が残っている。(松尾 俊孝)

碑の如く直立 緑樹負い奔流抱く

50年先へ繋ぐ希望

今井勝則さん

この人



黒淵の渡し船に乗ると、流暢な言い回しが勇壮な風景に興を添える。学生の頃から家業を手伝い、竿を捌く仕事は熟練者だ。平成生まれ、三段峡で仕事をする人の中では圧倒的に若い。50年後、探勝路を散策する観光客を見届けられる希望的存在。その頃は語り部を担っているのだろうか。

黒淵荘へはバイクで「通勤」し、土日・祝日には7時前に到着する。「感動されるのは船上から振り返る断崖」と話す。外国語は苦手だが、日本人と同じように接する。「賑わっていた当時のようにしたいし、見てみたい」。(炎)